





當代連歌集目錄

伊知氏書冊



神植や木く枝

森井三會信達

魚之ゆゝ花や

浅茅の會 逸堂

名のこゝろに傳

日追善 其阿

初まけ祢もころ

信達會 昌逸

古郷ふきたる禱

依出海玉會 辨中

寺淨き光りや

日祝會 昌逸

月新も新ふ

名所独吟 昌文

待比やいつくも

小倉詞十六句 貞臣

巢を出て嬉しき

大田智全都向玄碩

土産待や杖杖

花下會 玄碩

只一重喜や臨

同 昌以

宏敬る游る

清水中式 生貨

向陰ハ玄葉乃

仙臺志福寺乃舟中

橋を居る去年

水戸太田同 脩融

きさふきやを

首途會初旅 禘觀

羽白や浅くぬ

花下會 玄碩

夕小晴て朝陽ふ

花下會 玄碩

寺向ハお弁さふ

初旅寺會 玄碩

秋山ハくきをを

同 全

くまなく濃深しを

同 全

雪を下枝に

同 全

水底も黄むや本

同 全

大尾

當代連歌集

石井脩融輯

浪井戸天神會

文化元子年四月廿五日

何代

信遵

神植や亦るを若葉に青和幣

春をまゝしめて唱ほさくきを

五時の月れ山路の雲もあ

新堀を秋の風をさぬあり

立寄ふ里れ前田ハ色付る

夕暮近く人多く付かふ

桐栲を細き流れふかけ渡し

叔店

長松院

信流

惣代

忠如

雲歩

ウ 春根傳ひ母竹そ麻葉草

春雨れむりく山もぬりるそ

皆しも旅れ舎りかゝるや

引結ふ竹の花をかり初母

いと福まき福ハ爰たみも尺を

老るるも中りくありし物思ひ

所ハ小車れ家くそくき

積りぬる齡の後れ悲しき小

只一向やしたのむ御佛

弘文

利郷

庸行

逸堂

小梅

叙

道

如

歩

朝露を分はく閑伽を汲をやる

文

をかりかきくふ残る月影

惠岳

またれまは袂新ふ涼しくて

存達

碎をまきさらまを櫛干の許

堂

咲花を今日のまはれ食意ふ

道

心のとけくよむ大和歌

如

嘗も蛙とたふ時を得る

步

池水きよき妻のあけほの

文

未度きこ庭の葉山おろまをみ

岳

あか免晴ぬるをそまつけき

道

引速出る日影のさやうあま

昌永

風とえくよあつきものこま

道

簀タラニアハ生るう優りお志けり

堂

隠まて信ること海かこき

步

文加も旅ひよりる市の場

如

善の年堂々ふ飛鳥川

岳

今ハ只思ひ思むん燕の淵

文

朽こそははせはせよ せむ神
孀居の衣枕の月をえて
教る種も文る 秋の夜
夏さままを松の下 風漸 雲を
独りさむ 一々 暮を山位
今更ふと 曉や 待るらん
討身の使乃 勇む 武士
糸連る 弱も 心教 歩と 山て
古々ちりり 歸り 来母 多り
文 永 道 竺 如 道 堂 永

空をく 庵八月 此春 日山
波ハ 杏り 衣ろ 川 あと
初層や 今日 け里を 渡らん
田川の 水此 小こり 了そ ゆけ
夕立ハ 一 志きり 降るそ
日暮ま 残る 幸の ころき 雲
海り 見る 山より 山の花 盛
松の 梢を ころ 新 殿 あり
竺 如 堂 道 永 步 道 堂

右五十韻

文化七年正月廿四日

漢京日輪寺會

山何 逸堂

煮く得し花や法の庭に梅

折そ去りなき真雨乃記 其阿

乾鳥の影を羽ふくきつて昌寅

竹葉の陰のおるをくあり 昌以

岩傳くつくふ舟を下を雁人昌惇

月ふるありし幸の川上 昌永

夕風の落る山合雪も奈し通 通慈

昌功

赤向ふ外山や野邊ふはくらん 信文

垣根の居れ末の暮よ 通經

いづるふ小田のま苗もぬき 信造

流まぬ増まきとたまの以 昌功

思陰をさきと下を松川に 昌成

安けふ福ある床の雲鴨 玄碩

白鷺があきり捨つて去ぬらし 省叔

加茂の近辺の夕へ暮しき 宗阿

月くけて市幸の返さ道きと 喬支

車のをたまき露ふ志免きる 赤重

秋弟れ涼くを人目思まて 阿

今朝の別きのきくまてくし 逸

花ふのこ名残を惜む旅の宿 以

仍其と免よ山の関守 寅

嘗の棠ふとのきく笑ふ 永

くくや留んと待候とくきを 惇

月影を明方近きこきのぬふ 功

そよき志川海窓の無竹 陽

よむあふ跡心やまをらん 碩

佛のときき一なるそき 成

罪あるも只被を釈まて

在ふあき人の身や歌くらん 支

仍摺のよき衣の香を忘れくし 之

思ひふこらんよきをりもとむる 阿

謀のこしゆめくきハ分あめ 逸

几帳の内れるハたれそも 以

貴あるハ実ふも志と称れ様を
忌垣り清く生一ありま
赤雲春日れ山の神社
るこそ入へ杯入相乃侍
末幸き野原の雪を分候て
くふの狩場れ所定めま
形足ふも汲さうのきこの研ん
逢ハ思ひのとけて嬉一き
教ひつ侍一うをれ月の暮
寅 碩 惇 逸 成 宗 支 功 阿

翅あるへてころる 層う
棧のきりや鼠のむららん
雲ハくくふ峰乃一方
明果る禁ハ花の候海
おひはくく里くの概
長閑ある折の目叙のきし梅り以
箕の氷りおまえちるこ詠
寅 碩 逸 寅 陽

文化七年午巳月十九日

本列久米村長久寺より元弘二年五月歿死せし母殿三士の碑を写し巳百七十八年忌を吊施す八日本橋吉田^呂氏法弟日輪寺より張行

追善

其阿

名のみ只を付や其友依久良
汝堂跡とふ山ほとくさま 呂齊
涼しくを砌りふ月たさし入て秀岸

祀よりむれふり晴み多り 惠岳

旅人の仍来や幸しく送るらん 及文

處るかたよ明るる そら 好達

美そとハ梅の香ちるく白ひ来て送堂

柳を風うおるるくかけ 執事

いさきよく流水流せぬおの西 舟

侍ひてあるき川流乃る 阿

小回もそ千代ふる竹の打茂り 岳

露のむき居る土砂地の末 峯

仙人ハ何をん母あそふふん

只時の間りくるる暮秋

又る月の氣ハ志ハる頃きて

霧のあさけよ逢る娘ハさ

仮初の契り身よ入るりま書

船ハと多りをさハるまは

新朗江のあそくあるき渡り

屋む雅波の里ハ娘ハ

色深き花多昔乃宮所

つか

存堂阿舟岸達堂阿舟

松入ハ言ハくかふる夜房

暮ハく夕日さよふ山の端ハ

来るやと待てて空詠めせり

さくうふのいと思ひの跡はして

あるかハまハれ朝の蚊の音ハ

菽蔭の白居候ハき黄昏に

菜こりたきそ宮さいとハり

別着はる旅の夜ハまのれ添

在を秋風ハ出ハ修り者

立波を冷るらむ法の舟

舟阿堂達舟阿堂

續く濱辺の夢ハ晴きり
管弦のあこり八月の明のこ里
様のこそる三輪の市人
嘗の夢を忘る一の山車に
け限家を喜ぶ同歌
花ぬまハ只一向り酒砂て
心とり昔を思ひ丁そ屋色
あこりまきめふれ夏の今更ふ
たまふ逢款ハあると短き

舟 阿 堂 達 舟 阿 堂 達 舟 阿 堂 達 舟 阿 堂 達

うしやそ七人目の園北奥も哉
雲ぬまきまらハ春の山風
あたき川そ外上をいふ
書てを月り下を筏士
冬近と大殿仰り急ぐまで
都日まきまを渡る層々
誰を又春ハ尋る花の陰
是もはとみせおる不蕨
たるくと分越一野辺ハ赤鹿

舟 阿 堂 達 舟 阿 堂 達 舟 阿 堂 達 舟 阿 堂 達

ふり泣よりそ雪消き秋 達

享和四年二月四日

菅原信遠張行

花何 法眼昌逸

初夢れ根をころふんむ春の庭
^鳥多々晴るるまら柳花陰 信遠
蛙鳴池の中待き音かききあ川
月ハかきまぬあふふとむじ 昌惇

船人の神の追風吹まきひ 昌成
帆本捨ひて帰る山本 昌永
君母ハ冬を終りせん里くハ 通經
竹の小枝の霜 汝き色 辨中
巡る日ハ秋さくよとを思ひ遠き 清方
末ハ塔とをえ一ぬ田乃京 法龍
流きけ浅深あけ音ハして 其阿
夕ハさむしき晴の羽かき 玄碩
くき秋を所ふ志り初る秋の風 昌寅

霧多ふのきさう己が神の上

丸斗の松の月れ交る扱母

昌功

秋多ふを化とこそある也

羽

いさけきハ雉不小濃名を祓らひて嘉重

中よたをり秋くまのよある

川

終のぶかり待とる黄昏小

成

待も向來ぬ 山陰州唐

惇

うはり初花の喜雨日秋ぬりそ

永

さ波ふもる春れ 疑冬

寅

初霧の風吹まらふ川はふふ

重

初まる人や遅く出らん

方

國のこ多思ふ聖の成代不逢ふ

川

えくひーかそ妻と裳ある

經

命さくや 女の交りふ

寅

くく向ぬ福るくくとして

成

くき中ふ又物忌の目を添て

惇

最夜を多かきゆてそとら秋

重

霜金成候の野おれ翁さむ

永

花多々をまて残る 白菊 寅
いつの月小山路此 紅葉ありぬらん 成
月ふくまあるき 峯の月 新 道
渡り来し 教さく 又ゆる 天津屋 永
きりの隙こく 船乃入海 逸
網引まらるるや 香小呼あらん 川
爰う 野波乃 大宮の辺 重
逢えつる人の 昔を思ひ 逢ふ 永
棠ささふるよそ び巨々たき 川

馬車はとひる門や 唐うらん 惇
付里よこらう せそ ちくく 寅
とりあそし 涼きるき けを 砂る 成
いけけ 帯乃 ありく 勢らん 逸
花^{かう}衣おも 祓くまぬ 秋の 扱小 川
むし の 写音も 実さ あり つき 成
那 弓を 包ハ 俣し 月を 見ん 詮
在を 於し 身ハ 宿堂 定め せ 惇
陰このむ 花丁 ぎ 旅の ありし 道 川
狩の 使乃 乃 糸の と 著る 道

寛政八年辰六月廿九日

佐渡國會 辨中改國時

何年

其阿

古郷小きころあしきや夏衣

覚阿

おしるんこ庭の屋ままと松子

冬枯の垣母ふをうる雲吹て

安陳

月新こ海るあ乃一節

年直

暮るより末蛇のたや急ふん

麟澄

のぼるふりふ栖をそ志新

波茂

生績く竹の林の奥深と

副充

祿くらもとむ新むらう鳥れ新

茂堯

静々きハ人目を強し山隠に

祥庸

ころろほそくを伝るは木の戸

方義

かまらうあを算見のあれ音ハと

政茂

冬田の京冬はくり捨らん

富申

爰かしこ深層乱まてたもほ

籌救

えらこかへーや家のあく

備清

大君のあを代くり交継て

次賢

八十氏人乃蒙あふ新

富教

くもろともあゝぬ宛中此秋の月 正負

翅あゝこりこりこる 初層 勝義

うき雲やえりくかせの拂ふらん 尚啓

弘志きいはる浦の朝明 守身

碓山の花は今日もさき出て 茂陳

志月くむ所さく春いたのき 信清

志砂地ふ綴る日かり此も用やう子 徳充

あさり捨てや眠るあゝ霧 惟賢

仙人の御はいかると 想像 美矩

ぬきをく皆のむはこきそも 古明

けはハ鞠のあそひぬ 哀り 英貝

垣石ははらひぬこそこまき 勝俊

小車の履る方雲るき家思ひ 常法

ときろしるる恨ちりきや 穀忠

侍者の障のぬき晴るる 政常

向ひるくさ免よ山保とくきを 安慶

これそこの浮世の外のをと所 福昌

結ひよふたやわさく井のあ 信義

芳ぬまハ田面の月け新えぬ 光林

あひく尾花のやぶそこけり 成重

里をきく萩のむらぬるぬらし
 守之
 出る今り乃余波をそあをふ
 武富
 仮初の契りまうろを頼所ふ
 南喬
 さむらひあやむろたく寐乃後
 惠前
 侍人のかふふせん春れをふ
 汎恭
 くくひまはまこ果ふ終るけし
 茂昭
 谷の戸ハ雪れ隙さくあさらて
 副躬
 小川のあれ行束を堂ふ知
 美清
 里人ハ笑許の田城保りはらん
 常春

寺のまよへりくくひれ跡
 長京
 功乃名をのこせ頼ハ石碑ふ
 周音
 月^やあきた城あ^と進むらん
 執事
 也き扱ハ千くの思ひの頼活て
 人^多只露と消小し世間ふ
 遙あるをみる士のいりあらん
 芳野乃興れ依る良又後ほし
 うち案あむ音を志のうき遊の形

昔ぞ深む秋真北 山本
田子ハ今柳残一てや海らん
面ふありぬる里北 幸を才
いほくふり枕さ^い然ん旅の者
月の隈ある野一^てそ^く廣く逢
さぬくふをてまや^しぬる虫のさ
かよひるそての風そ身よ入
妹かりの及ハ身よを覺來る
同ひ一^し夕卦のくく^くま^まぬり

必まを待もあぬりふ 宿るそて
文の便り^り堂とえし^し家中
はくむ名れ^れさう^うひる^るに^に津ぬらん
終ふとけさる^るそ^そえり^りま^まこと
かこむ基^基の時の移り^りもいさ^さあ^あと
いののる^るま^まう^うハ^ハ朽^朽一^一斧^斧の柄
渡らんも危^危氣^氣又^又由^由り^り檣^檣柵
波^波堂^堂き^き一^一こ^こま^ま五^五月^月面^面れ^れ以
くら^らき^き扱^扱ハ^ハ螢^螢の^の教^教れ^れ取^取ま^まそ^そ
三日^日月^月ハ^ハ又^又入^入一^一山^山の^の端^端

益等男ハ弓をてぬる秋の野小
い川一り暮の幸さかり新
まこちらぬを小別る天付原
むるもよそふや家ハとふ己ま
高きうんはく一此沖津深
風を海ちてや船そ浮め敷
竹の葉れをぬく毛流る波の上
碓よむりふ付窓乃中
善ぬるはる一まのきまらん国の中
たちてこ居て見ものあふ頃

そ人小似くるあうさくき一くそ
負大豆のやとりをまこもとハむや
おまおむるあこれこまもも懐一こ
あこく免酒を砂そくる海し
更るを堂あふて泳り月の下
徘徊りうらむ敷句詩乃付ひ
き^る素人の形ハ実あも怪一まき
ありてさくくる鏡ハめ川ら一
ぬりぬきハ神の懐を引かえあ
糸の日教やちうくるるらん

祝子ハ清め了そまを新るく
のそめハ池のあハまききあり
う海く川ハ波の中まよくむれぬりて
秘をくもをともむくやはま琴
指替ー山瓶の花ハくるハー
あるーもくくる名のを用さ

享和四年子二月二日

太田淨光寺祝會

賦山何連詩

法眼昌逸

寺淨き光りや活ー春の庭
むまふ杖ふぬりむ開伽水 辨中
梅包ふ谷のり乃 踏分て 玄碩
雪ものこらぬかけとーの末 昌寅
一節の雲や嵐ふ晴ぬらん 昌惇
翅はふ社て層ハ 来母多り 昌永
里うけて月ふえりくも和田の京 通經
こままきりくる竹の葉け露 清方
ぬるる名根静よ 永さーと 清龍

樵とやちやも中一は某人 信遵
 まよとつるも神ははくりの麻衣 其阿
 ん多く深く法り深ら一 昌成
 幸うくぬ雲の林の種はまろく 玄川
 早とちおしく秋の雲そきら免く省齊
 時返はる外山の月ハ入詠ふ 海然
 又ぬきさつる 折のこころし 信奥
 をりくよ隣の笛の音ハ一く忠通
 身ひくよひ秋 人多し詩くも 美始

屋川一たる車を足ぬハ席一けよ 中
 実ふも秋の風俗やさ一き 逸
 種波女のかき一は花の色はて 宥
 あ一ハある葉のふとより深むる 碩
 むく冬の離呼あもを能む日ふ 永
 仙人のまをむ者多しつこそ 惇
 松木ぞく道りくくよ分はくし 方
 いふきの流ハ分ふ了そふんま 訪
 五月西れ多あ一も折目し晴る坊て 道
 そよのき出寺秋麦の秋風 鍾

梢母ハおとて留蝶此亭
 夕日さしふ蔭のはれの戸
 立やる煙りも細き里たる道
 ありまじくの岩のたさぬ田
 霜氷る竹の小枝ハるをきかぬ
 初くら定ぬ鳥もい川らば
 うかれ女の勢りも月のおろくま
 冷ら甲のくらのる夏やうかろん
 恨るよ起て別まじ一床の露
 神のありとて雲飛んるまを

成 阿 嘉言 川 真 終 始 通 逸 中

夏衣ぬけむやをこまむらん
 御後の海さいそかり道
 水に流川水よとハまや暮初て
 涼くるありぬる山本の雲
 あり雲のさる根をえぬハ白妙よ
 持まむ野辺の風もをけしき
 移ひて萩もまきもおれ
 詠し月の秋そふけゆく
 虫の音乃るるきよらじハ哀めて
 るよれ甲のくらや今物志き捨ん

川 寅 阿 永 惇 方 鍾 道 終 成

名残思ふ神の香残を花の陰
八重紅梅堂ちりかこれ色
春深く竹くわ野の文所
案あむる場の持ハ類一ふ
梓弓まると内まると日の静母と
いふ一へ今をあもふ付ひ
撰垂一奇の心乃さるくま
いろとりはくま教の繪合
えやぶりくりえやら扇のこや種
成 碩 方 狂 寅 川 中 言 碩

名のふもととも逢瀬頼まん
書送る多小情を志まか
思ひ初一を志まか 明葉
借ハ月ある手ははも所をさる
きりる魚こておまの世の葉
音波一萩の下風吹まきこひ
波堂あさほる濱の満汐
系人も捨ふ船貝とるをうん
去砂の末一あそふ延虫の子
方 川 成 言 寅 永 終 繁 惇

思ひあめり舎り定ぬ色好こ
うま歩行も痛セとるりぬる
踏ひと免ぬ家魂をめりせん
遁まもまてますふ在回
いとちやの佛れ及を尋来て
白ふ初嫩乃山の踏の月
波麻の暮るも近き黄昏小
野守う二居れ秋そかま一き
沢水の流まいつより絶ぬらん
中 碩 永 言 寅 川 惇

生活てるを忘るき菅の根 碩
花のまもちやち言うま小松原 成
朝う事深く西成む山陰 然
立雉子け雪海お羽ふく暮うハ一永
春面まら野道のまを方 理
陽炎やちちるとまれハ消ぬらん 言
光りほのうり一尺一稲妻 惇
月喬く川田の面ハきりこめ方
ま〜ちり深ぬ柳い〜本 寅

鮎をふる川 淵より望む神多し
倚はまぐりしき 檣の榭干
なめきををいともふゆるしそ 砂酒ふ
赤はたとひはく 年海志とゆく
あふ田よそまきし 屏風たふるが
ましうかぐまのまをりと媚く
いと尚物思ひまをる 琴の暮
こいぶとりきく 松の夕風
世離し 深山の安く 信訓て
きまはこと 詠をもまことの衣も

川 成 碩 言 中 川 終 永 方

そき捨てみとりけ 髪も惜し
ふくくをいともふゆるしそ 砂酒ふ
引くまを道をも思ひぬ 軍人
出せし 船をある波の上
後免くる花の香吹音 砂て
雲井はるうりか たる層う

惇 碩 成 寅 中

寛政十一年六月廿八日

何

白川侯亭會

其阿

踏ふよふ 甘夏を忘る 朝に清水哉

螢飛ふ不亦く乃下陰

白川公 定信

短扱ハ短居るか下よ明そめて

外野右美 爲長

月をい川くく西よ更きり

阿

赤白ふきさのさる根の雪の跡と

信

そことも忘らまを男麻るく奉

長

行旅の及たとくし夕つら暮

阿

急く泊りハえつて青きき

信

一節のあも分まや霞むらん

長

ふいと一もあるきまぬ乃空

阿

を困るる悪くり花も咲出て

信

あうらるがしき園のくくひま

長

人も又るとかハ家をよまさらん

阿

いらひとよりせぬ中北はまあるき

信

送りつる外の海も絶果あ

長

ちりこそ積ま独り寐のな

阿

波もろし餘所の別水北陸の音信

信

曉記の神乃 ちらうは中

長

かふるさく朽て幾秋ふり寺よ阿

阿

まを穂のまきき誰ま縁くらん信

信

浦うけて月をある母の暮るをこ長

長

いさるあひはく雲 帰る釣船 何
立せむる管座のきふり志川うまて 伝
ゆたりあえある里の物助 長
風已るる竹の一村おるあひき 何
禁下の及乃るあはぬり一あ 伝
宋人の運ふ菊の花をこまこ 長
実よ安けるあき世の中れさぬ 何
逢ハ又別まの其まや重ぬらん 信
かこ川養たうきくくかけのきや 長
鬼よ角に先達ものハ涙あき 何

くく大君のあまにかこき 信
くり返一千葉や砂ん兼此酒 長
今日長月の新そえあふぬ 何
雲あも晴く外山の秋のき 信
きぬこの音を消すさるあり 爲
祿屋る有羽田の方ふ厚あて 長教
生野の及や雅よ何ま一 信
今ハたや交加強一黄昏に 何
鏡のをかりハさもあふあま 教
一夜の繁り斗りを 命あみて 爲

より合難き者世ありらん
其風よ柳の糸の弦を弱こ
人のこゝろ海そ花よ引おろ
永日をも慰うよ川旅の空
い川ぬる里の便り波るん
知らぬひの葉は京地をく秋交て
云まぬる杖ふるも冷し
山姫を飽まやあそん月影母
あゝあゝあゝあゝあゝあゝ
阿 信 長 為 信 阿

天明五年己八月十五日

名所独吟連歌

花何

昌文

総 武 駿 相 奥 相 近
月影もあやのりこそ隅田川
いも千種のゆきまき野
富士の雪ハ雪より上よ晴初て
時ふれかゝるは柄乃山
行旅の衣乃園や寧かふん
人目をかおろく浅茅生の里
近 孤さ志賀の浦松風明る

近 津 湍 不 消 る 波 の 釣 舩
日 明 ぬ 日 や 震 る くら け 村 ありん
楳 野 波 あ くら の 妻 の 葬 一 さ
日 下 前 の 草 香 け 曇 八 於 磯 して
勢 山 田 乃 あり 菜 た れ け 摘 らん
大 畚 来 一 布 ぬ の 中 乃 施 け け
日 い 川 六 向 ん 小 初 濃 の 奥
山 休 ら び て 伏 見 小 婦 け 時 多
山 宇 治 の あ くら け 月 の 暮 さ
山 有 徳 け 市 幡 の 里 け 秋 風 に

日 勢 山 日 大 山 山 日 眞 甲 日 眞 信 日
思 び 入 け 朝 け 涼 草 け 露
山 の 名 の くら け とも やら け 別 来 て
源 の 河 け 孫 ま け くら け け
三 吉 野 け 花 を 忘 の くら け 津 雨 け
朽 る 岡 や の 妻 け 倦 一 け
眞 川 誰 け 白 籠 乃 里 乃 夕 暮
日 己 くら け ち 暮 一 定 城 野 の 末
眞 旅 け け け 秋 風 の 園 敷 け
信 比 くら け や 訓 ん 姨 捨 の 月
日 くら け け け 暮 乃 麻 衣 肌 寒 け

信 奥 長 播 摸 日 山 日 近 日
 セ免てぬせ危の露の旨も向し
 陰奥の身ふあぬりふ路やせん
 たゆふ堂をさしあふの松原
 右郷をこひの湊よ舟と免て
 養る流そ須磨の浦風
 介て来し春も夏のとを井空
 鳥色の山の霜うをむは
 ぶくりささと音羽の方へ晴やらて
 大津の宮そ松よ魚こつる
 秋も今市景時あるくお尾の里

近 日 日 日 日 和 日 日 河 日 近 近
 月のこ危とを田上乃水
 仍層の勢田の渡り小春きいて
 かこの松やぬよる白らん
 雲みえし大嶽いつこ夕かきこ
 吹風よがし春日野の春
 うらあきき秋生の里れ初花よ
 回を縁ハねる所かし乃夷
 所一つよ思ひつけあ末とえて
 神ハるこのことをとてるま
 浅書の手き繁りもたま免や

近 一人もたのむ逢坂乃山
 眞 仍末もあつ川の久はらき物哉
 日 祢らきやハまる十舟のまらこも
 日 又る追賀やせし里人涼むし
 近 いかよふ月を甲のり奉乃香
 近 むらぬ野路の篠原露海て
 日 本守の小田千一麻や千む
 山 片是れ秋こそくまれ増らふむ
 大 何よ恨哉去葛系れ山
 大 逢訓のからぬ中もある物哉

河 近 身一ツよ着も初めれ里よ来て
 日 和々んハかるし化野乃末
 日 花の本もをるれ喪の夕風よ
 山 蔭くや葉あむ鳥籠の山松
 山 喜も中よと時の後りや氷りん
 山 ちよ管好く淀の川舩
 河 ありきおよ交野のまは家お俺て
 山 牧の暮いよふる外の里
 山 葎のこありて風の及もる

河 日 駮 阿 日 楳 播 日 信 日
雲よやとささきさづけの山寺
行舟の時の暮ふ日ハさして
波路の末ハ浮橋り京
松風此時ふれ破や晴ぬし
連はく出敷里の蛭虫の子
仁吉の市こそ月ハ花とふら宛
哀さいくりり南備時秋
暮る源日尾花の舎り人をるし
飯坊の御持やきのふるりし
ま霜乃弦施の及ハ埋まきし

日 楳 山 日
秋涼の星を別まきゆく神
津の玉れたまを余はよハ勢多し
末栖の小野を彩むをりるさ
益等男此弓山隠ま写きくま
ハ情の春やかまこと添らし
種あらまを多ぬ田のぬれ末りけて
ゆく人多くまの今里
白るや唐津り候ふかゝるらん
光りくくふ伊勢の海はふ
深きを楓よむるく致麻山

磐 山 山 濃 眞 日 筑 陸 紀 日 日

一はぐききし辱う祢乃こ
ふくくるる秋津の山此れ夕霧ふ
哀冬何といもくく此月
静の音を深覺の里ふ波馴て
扱もたけく海のまの身かき
深此ふ神の渡りを人よ問へ
思ひの何れ浅瀬志らもや
菟まよふ花の濼える妹背山
梯田の名を其のかこみよ
布留里ハ農斗を詠再

河 大 日

薄雪の野よ白ふ日の氣
緑り流ふ小笹の乃や續くふん
朝まよきとりたの市の市人

右名所大尾

小倉の河立入くる連河

待頃やいつくも同保やときを貞良
白きをえまは垣の卯の花 章甫
夏川の芦れ丸を不る晴て 貞樹

車馬子種柳

仍末まで冬 田川をさしな 紀迪
糸上や思ふせかろし音奈らん 甫
峯より流る風冬強きり 巨
月出る外山の處立そひて 迪
志と〜とめむ唇の歸るき 樹
其毎又嘗る物とハ志るもろし 巨
いり再久〜き旅路るらん 甫
勢り〜ハあふて浮世は恒徒然 樹
家所をと川の思ひ強七を 迪
必まといひ〜年ふ年を強て 甫

かたぢり散る歌 命をりきあや 巨
冬かけて思や柔軟の虫の暮 迪
五明の月冬秋そるり 樹

右十六句

文化八年未三月四日

太田遍照寺都師同會

唐何

玄碩

巢を出て嬉しき春や郭公

包ひかきまぬ花乃一本 智全

春風や霏く郭公は通ふらん 玄川

みきり小跡る雪ハ消きり 房之

靡きあふ竹の下陰を困ぬ 全

小舟さし初末の川涯 碩

山の鰐小月ハいさふ夕 る雪之

層の翅 すくもらふ 浮雲 川

千町田の穂葉そよめく風強て 碩

往來雁 ふ 里の中道 全

氏人のさくやふの神祭 川

本端 は 涼 し 瑠 の 庵 あ 之

おる を 鼓 の 音 は 笑 へ 来 て 全

あ ひ 冬 を 別 る 時 そ 物 う き 碩

と め え ぬ 渾 や 神 を 祀 こ せ らん 之

二 乃 か く ち る 人 い け り 不 せ ぎ 川

かりのせよかり漢をたのし て 碩

佛の姿あつぬお詠うさ 全
 沈せくく御母を月此を物を 川
 中よよつも青を夜ハ晴るん 之
 野暮りて吹来り風も冷う母 全
 書と麻の暮り 夜 たり 碩
 旅衣着多き道を分たひて 之
 雲の魚こて雲あやる古々 川
 咲花よぬお洒く志賀此浦 碩
 御子沈川の流ぬる免り 全
 岩橋の末仄うるる春の言 細基

書本拾ひて顧 影 山 之
 三日月の歌や斜よさしぬん 全
 西こそ秋と 風の音伝 碩
 且くも外西の柳お散て 川
 露のむきを履る筈蟹の糸 基
 赤宵子り向ふやと独り夕詠 之
 磯ぬ思ひの所をめむせしん 全
 五塔の山よをささきり入 柔 碩
 何も浮世の外るぬ 岩 川
 心こそくふ後の生まを歌はほ 基

只明言不唱ふ六乃字之
新推まゝくお波を業として全
登まゝ衣を忘るる綾の女碩
そ採来て市よらさくも山栴川
酒ある門多處む方く基
榮へはる家居ハことに其めきて之
よむ云の葉乃乃其豊けき全

文化八年子三月七日

山栴

出産待た枝をほくし此玉の花玄碩
柳よちきる都路乃其 玄川
年毎小燕ハ新器回馴て 綱基
雲居の余江よ層海あり 教文
海京や長田に毎の時ぬらん 辰之
出の蟹の小船かまをく 直員
月ハまゝ残りて照まを山言こ 智全
足れハソウの深一施葉 光賢
小男麻の春を嵐の送り来て賢了

夜半空——出る野のくま
今日いままこ舎り定ぬ旅乃空
里とちぐまて燃るむら竹
一節の及かまうある山本ふ
通ふ兔のいづちまきらん
古杭八只そへ小赤里ふ
長柄の檜八名のこ残まる
苔むせる松ハ常盤の色るまや
張ふえよ——よ末もたふる

了珪
執筆
川 碩
基 文
員 之
全

侍はけて今宵嬉しき新松
はもり思ひを月も増らん
夢秋も堪て伝ぬる雨の世も
芦此まらる屋乃風そ所も入
召多々田西の稲葉刈果て
人氣絶ゆる禁色のも
仄うある漬経の暮るや寺もん
きりまはけ——きぬ法の理り
明るふ空の教とふとこ海
漸く己ふハ屋ささハ屋きよなり

了珪
碩
川
基
之
全
珪
員
碩

立出ん多ふ八日ませの市乃汎尸
雨ハ暫一よぬりる一跡
月小る白松の梢の雪詠又て
号く志河多き暮のく風
啼奈ハ垣根侍ひのきりくを
人聞毛く車やもふ釣籠此外
踏里ル牝の白ひ麻一まま
こゝ詠一いつり思ひをそ添
え初はるを侍のこまま兼
履こてをそき道の小車
川 基 珪 員 了 川 碩 全 之 了

炭竈電や安楽海の峯よ多ふん
風去ら海りし名乃山陰
三吾舟ハ時又花の曙ふ
六田の浪乃おぬるむ奈
さま神よ雲を拂ふを旅船
小ぬを晴く竺旨立や誰
そこと一も已らぬ端りの夕暮
くかき出つろたふあや一
色好む人の翠の化めきて
頼むもたるる夏の世の中
川 基 珪 員 了 川 碩 全 之 了

得しや樂とありぬ月の宴 碩
千果の秋をちきる 祝言

文化八年四月二日

花何

昌以

只一重まや魚くくして夏衣 玄碩
植根乃卯本候和歌頃 了珪
郭公山を郭端の者同あ 国禎
峯のあるこに西冬晴きり

宵るる月や雲間を照まふん 智全
浪をやり奈日 水の泊船 直員
種み出てるむくや芦北村くよ青山
又海一をさき山茨の 前 教文
行人の跡を際るき及志末 忠彦
塔て冬能る小田の方く 宗室
玉安く流る世了そ樂く多き 檣洲
心をぬく深る云の葉 昌逸
今ハちや難 面中を和らきて執事
新松をハか己まこまこさ 以

新もよき歌以伏見の里此月
 うつや碓の音多たゆまを
 秋ハ秋森しき海白夕るく
 そよふく風を所よハこそ志免
 花の陰香を誘ひハ近付て
 晴ちとりの空ありぬ暮
 屯田あも笛の調やあはまふん
 多州集ふ山本宏厚
 川橋ハそのと此里の指南あて
 宇治の渡りや暮るのこるらん

碩 珪 禎 全 逸 以 碩
 碩 珪 禎 以 碩

向ふまハ物志つらるる寺の前
 空ゆ歌ハとく仍ひ乃暮
 在を遁ま住ぬる人の隠家よ
 立ちを葉の煙り細しな
 群一蚊もや稀ある秋の末て
 国をる月此歌そ志しむ
 於ぬこそ形見と思ふ扇あるま
 袖ふ残りも床したき毛の
 別てハ又の逢ぬの歌まて
 山川下ま松本かま

逸 員 珪 以 碩 全 逸 以 碩
 碩 珪 禎 以 碩

花散一泊ハ舞一き伝樂に以
晨たるをく黄昏の空全
降と一毛又ハぬハ喜れ小面母て珪
喜むハ志なき野色この美
舞くハ由牧の豹や勇むふん
風吹きあまむ負豆の朝明
目小そたのり葉々中此運梯
祚繁りまを以ハ近一なる
改めてをくは連繩の清くし
去砂を忘るる瑞籬の月全
碩以洲禎員逸

文政八年未三月廿八日月次

於清水寺田養院本式目

山河

真賢

岩蹴る瀲波言一松の夜
春深くあるをの川上賢了
朝霧あやしの渡りよ立心勢て
去来を運ふ神反るるり
里をく海を月や送るふん
野節志ふまてを方そ晴る
空賢
宝性院執行
竹犯泉
范守
光賢

花の色候分まじくふるまはしに
 荒くる吹そ秋乃夕風
 漂ふや又時取なんその雲
 借ん今りをを多くる乃の道
 只暫一陰の秣を飼捨る
 又之類方れ更そ本深き
 いのよりう社を崇め並つらん
 朽るかふぬを靡く巨連縄
 五月ぬれ津はくきたる小田れ京
 小枝をききよる廣る竹の葉

他代 範助 松丸 作丸 昌賢 劉賢 執事 昌逸 昌以 六

月とよも向かていぬせき窓乃前
 只独居の秋そ物うき
 衣持音り思ひの絲増て
 船の方子舟まき母きり
 漕船の舟糺ハ於白波よ
 定るきこそかくる世の中
 風渡り砌の花れとく散て
 甚の欠残の店や掃しき
 そふぬりそ朝婿棄めるぬれ音
 又丸いそ酒をぬめたや

七 八 九 十 以 玄碩 智全 国禎 逸 了

儲けさる牙ハこゆりまはれ 破 歳 以
扇葉を拂ふ 松の 下 乃 逸
競指已け入 山や 深 久 し 光
弓張月のの中まこ 残 夕 空 了
扇葉を羽ふき して 渡 白 層 の 暮 了 碩
不田多々 笑よ あり かく 泣 け び 禎
流ま 仍 依 保 の 川 水 冷 り まで 以
暮るるよ 夕 夕 夕 妹 許 の 神 了 逸
んこそ 豕 通 沙 井 志 有 へ る まで
拾ふ 書 亦 多 々 い さ 老 老 の 山 碩

谷の戸ハ かんろく 花は 埋 まで 逸
鶯の音を 變 有 まで けり 以
九重の内ハ 磨くも お 磨 磨 空
皆引跡の ほくく 志 砂 地 全
交加を 纏ふ 今日の 神 糸 了 碩
裏うー 仍 道 の 小 車 以
情を ほ の 又 初 て の 物 思 び 了
覚ゆー 羨 そ あり む 久 び る まで 逸
片敷の 花は 月 の 明 照 して 全
きりく さを 於 写 志 する 暮 了 碩

草村子踏つる露の涼きや全
晴るより野辺の白雨了
お向ふそまことよあつき喜日山以
香居の奥の清くしきよ逸
秋るより白きや花のあふん
かまことたるをく松原の末以
灰うりるを深めし静れ音逸
契るあつりよいさや思はん
世解の糸を乱まそそ家思ひ
又いりるあふんけ世後の世全

仏を頼むんの一 向よ逸
者向るまきし小初瀬の里 碩
桜花をほほ陰もあ葉しそ 空
ほましくとふる西村の畝 禎
徳たよ信ふひか己を思因士 碩
詠り月の交るををいさ 逸
曙居しそ涼しきありぬ秋の物よ 全
露の垂そふ 桐干の女 以
井のあり砂人きくに強さるし 碩
迫り逢しハ娘し 親と子 同

うき婦を堀つゝ命ありらへて了
出て仕ん時を 計時 全
皇の意をわらぬ由もある
備ふ御貢の敷ハ多し
ことさらに好きて舟や送るべし
付舟の使を實に答るあり
仍人を稀るるハを築紫浮
小櫛のさしも別まうるき
媚し海も終りて明日夜は
釣竿もり月ハるをく寒けし
全 逸 了 同 逸 碩 全

い川の回ふ朝のり霧水もん 逸
竹の負の あり 強く 逸
花をさく回人ハるき古寺は 以
及の毛を削て昔のむまじし 碩
妻の目れ山陰近もさしめくり 逸
く解くうふも 梅ふ系遊 全
海の層敷や翠今相ふ敷ふらん 碩
屋を志るうささる殿の上 逸
船浮ふ海京をく明離 碩
きけハ隙あるき 延雲の碎る 碩

細引まらるゝふの獲物や多うん了
実もも難波の付来強しな 逸
賢くも譲りあふしそ位るま 碩
畔を残しそ他日千町田 逸
弘こまる竹の根さし此方くま 了
他目いとひそ立る国の子 碩
きぬくの被まらるる月をじ 逸
とく免兼しる源をさぬし 以
袋秋の衰れ活つる虫唱て 逸
るし昔をあらまふ古歌 以

うをれしるま紙の文字ハ介かここ碩
細きをまのの書れ燈火 了
手おんと居垣の花の陰向て 光
活らるる魚のあそぬる 以

右

文化十三子年三月廿九日

仙臺廣沢山寺後寺張行

初何

辨中

陰向ハ云葉れ花の盛なり哉

松をこころりの真深き庭
池底くありあはれ立の語て
いと快く蛙るくあり
山の端小月や涼しく晴ぬらん
秋も穢んと向ふ園の戸
古々多き早も近しと急ぐまて
うきき旅衣を何まよハを敷
飯初の及れ指南を頼む身は
未時ふるむく小筆の條筆
浅沢のありいづこを流らん

我
我
我
同
我
全
中
全
我
全
我
全

イむ神へ通ふ 秋風
小男麻の衣書こふ身の一
月多はの先く宇治の山陰
世をきく信るんの一店
明きふくく志ふ 秋
送ふんのあれ便りも結果て
深き神の恨をかきく
とんよのこ立化波をめむせん
涼くるり仍家思ひ川
くくくま飛りふ螢乱ま合

中
全
我
全
中
全
我
全
中
全

風吹誘ふ窓乃吳竹
我
得ふを八折の外山此村時每
全
牛引はまきて帰る里の子
中
ふく笛の音も面白く波せらん
全
糸りの場多々詣通せぬ
我
玉垣は誰う祈りを成返連縄
全
るうき契り此末を了そ思ひ
中
いとけきさう姿を月よ死らひて
全
はめる杖よ何志のふま
我
分りハ襦袢の露や涼ふん
全

ぬり出さるるく於虫の丁え
中
旅人の歌く此休らひよ
全
飽を詠ん次磨の浦波
我
白妙は積るハ雪の淡幽傳
全
千鳥むまきこつ明はのこ
中
老ぬまハ枕の爰も踏ハる
全
君ふを幸さき昔るり多り
我
古寺此瓦かゝぬき葺むして
全
清きをんま免る言あり
中
姨捨の月よハるる雲をるし
全

風不今更晴る 浮雲
 連る 層の翅をくあふハよて
 里乃田面乃色不るる比
 交加の滋きハ乃のかさくま
 いと海をるるに渡を舟人
 めるふくそおそかきくむ花の枝
 雲をぬく免るはく山吹
 梓弓やふひの別き惜まて
 引と免はくもあそふ糸遊
 右五十韻

我全

文化十二年子五月廿二日

太田淨光寺會

御何

橋をたのぬり去年此枝お哉 備融
 花うきくあるまき 山郭公 辨中
 五月面のふるき折端小体ふひて 辨乃
 はくあぬ神は風通ふるり 活英
 岩をく小舟や掉は但まふん 智全
 續きはくぬ竹の下乃 始真
 雲晴る月の光りれ 暮昏小 執事

いくはく峯をこゆる 層々の
刈初一禁北小田母人足へて
分るもききき 雲の 暮の村
うさはくさ思ひきく 旅の空
あゝぬ情をかり 初北 者
語らふも偽りり ちれ縁一まき
化とあるく 頼むうまき 女
追風待いく 吹明るの 泊り船
管毛る月の 寂さゆる あり
るるくふる 時ぬれ雲の ころそよ

融 中 道 英 全 脩 中 乃 英 全

友呼猿の 暮り 暮り 寂疎き
在離て 伝る ん乃 一層
二度三度 百よあふ人
時免くハ 色解更の 花車
雲をふく 免るはく 一 款を
速より 出る川 船歩くをこ
吉野の 澁れ 音 速 あり
潔く 健来 施せぬ 夕稜
月より 向ひ 夢 神の 涼一さ
露よこく ころ 顔る 我 涙

脩 中 乃 英 全 道 中 乃 英 全

茅立臨川人の雅西さ
秋風ハ余似よ波さく其支物を
漕はま帰る蟹の物舩
松嶋や雄嶋う縁のあふ波小
守と名古るの園を裁ちや
勇と竹足毛の約や誰るん
善を深免て吾のふる里
山風小暖をこきり此冬の梅
いりもこさ月ふる常盤木
離つきて求食ま砂れ露の暮る
全 法 乃 中 備

屋むをさき和衣の浦波
赤き光りや流る玉津一海
中一きこく海移を御鏡
習らしといひ一斗を契めて
逢はてねある身をいりせん
徒らよ恋まてふ名のまもるし
思ひここまてあけぬ黒髪
志くくと明け月の細殿小
汝もこひてや留虫乃暮る
法の及ふ入む暖露時の秋更て
全 英 乃 中 備

あまのむすかひりそこの女帝花 脩
土産よとて白毎よかさを花枝中
履たるをくはすの山く 英

文化十五寅二月三日

初瀬山より護国寺院代下向ふ付
首途を送る連歌

送首途

護国院 諦観

花ささきややをもみとり乃旅衣

野路も山路も石履晴り 護国院代 教任

藤うま里梅の末を善 集議席 初て 秀雄

松ゆく風乃音志のうまり 前うり席 秀印

汐と川る浦遠は月や浮やらん 海成

秋の千鳥の集ふ去砂地 快演

森雨のこほまき一後ハ瀬宮 上座 実應

たぐ社見一祢竹の下陰 豁善

朝夕小栖の夕より赤たむき

免くる田中の通ひ杏けし

小野の山又来て分敷冬枯よ
斧の音いさや年木ころりん
天彦の音ふる鳥れ唱立て
岩穴のろちり住や優遊塞
月よ志く苔の庭乃泊ぬりぬ
雪の毛をそき長坂の夏
砂うらまを暖酒乃酔るし
市の帰さこの神志付ひ
三輪山や祈ん祓の前ころり
踏ふちきりも志るき伝連縄

ゆりり何の花のまゑを尋来て
明るたやまきくくひまの暮
柔消て砌の垣何ぬく風よ
池も稀や聚り 白波
教多く浮へる魚の鱗ぬりて
八幡糸りの人の娘ひ
又後せ八月ハ仄な指せり
松村あるをくきりのりた
列々さも山の嵐れ絶くま
侘くまら音山そ留るり

健男も弓矢を捨る法の門
折雲の細をかくる 古寺
あけ暮るよ函の控を忘まし
ま苗とき免く民のあり己ひ
涙り竹山時多かへり来て
都のやうをあもひ屋の神
残し金を嬰子やいうるらん
揚る間を中の川馬 髪此末
とまさらよ逢ん物そと暮ひ来て

積りてるとう初盆の外此雪
冬終る席りの及此志まこつてよ
祓多よ雀よとも小僧あう
咲花を咲ぬ梢小こきませ
松其色こぢりつ返の春

文化十一年七月廿二日

花下深習園會

花何

玄碩

藤も浅くぬ色の棠一哉

霧の光りを添白 松垣 昌以
 山里八面の余波の月よ放て 昌雲
 外面の曇乃 風志のつらり 教任
 十代田や敦速より仙島に 長福
 樹たるりく 香枝 暮りく 光義
 生茂る竹系むらく 赤麻衣 直升
 岩根を傳ふ 糸そ涼 正克
 暮るるまで私さ ぬるハ誰るん 橘洲
 川 志は来多 明日此烟り 昌逸
 雲もよ此系色と なる小野の山一宗

横川の奥ハいくよ 津るらん 石
 風渡り枝の本立此陰深と 以
 いとく宮居の上久よ 暮り 雲
 更る扱の月小鶺の暮りハ 任
 きせ老やとのと衣をそ 福
 家宵子を待り 秋の夕く 逸
 思ひ雲うハ乃空 詠 以
 花散て後を鼠の音 碩
 暮も暮り 松 下店 升
 一節小爪木の 烟り 霞ら 雲

ゆくむ人も波の何く磯 逸
沖をさしあふ成る夕津方 以
片帆まうくに小舟こくこ也 碩
飛くる乙鳥の翅 輝けよて 逸
今もく層乃 渡り来る空 雲
赤向ふ田面 色も色も舞くら 文
月もあて人の通ふ鳥羽山 以
降晴て積まると浅き鳥の雪 碩
花待比の青をそ 踏へ 逸
野小放つ 荒豹の舞を閑よて 以

小沢をふれ 粟あむ 新明 文
向ふらん 休えんの星は 遠くは 雲
い川くハ 逢て 新花せん 碩
い己けるき 宿よりつけし 永欠 逸
あり己け 髪よ 思ひこ たるく 以
包めた 涙や 神よ あむらん 碩
身の 嬌し さいの い己ん 方あき 逸
守とるり つるも 今許されて 文
君の 意この 作くれ せむる 雲
い己ふ 髪これ 例し せくる 九十九 逸

ふとぬるのそ乃んさむく 碩
其毎よ友の同来る家様 以
永き日ありを何くる 盃 任
右世久

文政四年己五月十一日

花下種心齋會始

唐何

久不晴て折燭よう月ま梅の雨 玄旦
玄橘玄咲初 宿 了哇

仙臺連呼

郭公今より刻む暮り待て 八幡権僧
くるまハ神又月ほのうるり 法印 由清
草枕仮寐の野辺の露 濃清
是て身又入るき旅の乃 院芳
浦風の波うちよまる 明俊
向ふそ方一 近き磯山 孝應
降雪の晴てハ雲も残ら 能方
里志川のるる 尚次
何人もらんありけの 宗真
あはれ結翠の暮るそ 邑信

八幡連呼師

薰^{キフヤ}不^三下待思ひここの^三死^三し^倉 直員

几帳の奥乃^乃麻^麻一^一ま^まれぬ^ぬる 教文

と^とり^りく^くま^まま^まり^りの^の夜^夜の^の媚^媚きて 長烈

面白^{面白}き^きこ^こ找^找あ^あの^の足^足踏^踏 金重

作^作き^きえ^える^る祢^祢の^の御^御前^前ハ^ハ清^清ら^らう^うに 直計

井^井垣^垣魚^魚と^とて^てを^を沈^沈る^る月^月新^新 豊常

爽^爽の^のり^り大^大定^定人^人ハ^ハ者^者在^在と^とて^て公^公章

露^露並^並後^後を^を玉^玉階^階の^の上^上 如^如垣

志^志砂^砂交^交花^花の^の木^木陰^陰ハ^ハ塵^塵も^もる^る 禰^禰齊

音^音も^もを^を聞^聞は^は鞠^鞠あ^あそ^そひ^ひせ^せり^り 禰^禰井^井 聴^聴法^法

名^名残^残さ^さく^くあ^あめ^めり^りそ^そく^くき^きて^てお^おる^る 用^用木

羽^羽を^を休^休免^免て^て蝶^蝶そ^そ眠^眠ま^まる^る 北^北野^野別^別當^當 禰^禰秦

群^群か^かり^り一^一鳥^鳥ハ^ハい^い川^川く^くま^ま去^去つ^つら^らん 禰^禰恒

仰^仰り^り出^出る^る田^田歌^歌廣^廣一^一も^も 大^大律^律寺^寺案^案衣^衣 大^大綱

交^交加^加の^の踊^踊る^ると^とを^をる^るき^き里^里離^離ま^ま 雪^雪堂

立^立こ^こそ^そり^りぬ^ぬる^る市^市の^の日^日又^又く^く 順^順店

坊^坊か^かく^くき^きハ^ハ名^名の^のこ^こま^まは^はる^る生^生業^業 忠^忠店

い^いう^う又^又た^たの^の祢^祢ん^ん仙^仙人^人の^の乃^乃 祐^祐文

谷^谷の^の陰^陰深^深く^くも^も名^名を^を埋^埋ま^ます 範^範助

冬^冬より^{より}白^白ふ^ふ梅^梅を^をこ^こそ^そあ^あま^ます 範^範如

楯の穴れあこりハ寒さ忘るは 眞了
 女とあむととりえる窓の月 空賢
 寐も危らま昔の秋の思まて 淨賢
 露は泪は神そ志はるし 眞尊
 慣として待を己をしきけ夕へ 俊賢
 志しぬる琴板思ひまきれん 秀兼
 左迂て仍ハ昔多き國るれや 眞深
 かくる船路の末よ白波 橋洲
 雲井よも續くはとある和国の京昌逸
 立己くくぬる虹の一夢し 執事

葛城のさ根や夫と算ぬん 珪
 仍ふ業忘さそる 山伏 眞
 室の戸に移ふ月の歌交て 如
 片交つぬる 袂 冷帯し 負
 秋ハ物物のかるしき後ん 重
 春も幽くり留天津屋 素
 又百花の別をハ殊は惜まれて 損
 春の日教そ残りまくるまき 逸
 鷺くまを禱のちまきハ案あまし 眞
 尾上虎志吹出り帯々 淨

詣来て祈る初瀬の山さる
契りし中よ甲斐もあれかし
うろたふを廻り逢んと頼こまて
送るはほしき文の一字
因てまき夷り年も鍾然
明言ししも身ふ古々
月よる白敷は山を歩望こ
風の便りう傳ふ麻の音
野を度く枝をたぐみ萩咲て
尾花う神乃露あけしも

員 損 逸 淨 重 章 如 逸 損 員

續く田の畦さく分ぬ黄昏に
焼火そ志らく帰る台の屋
とこもころ蜜の氣は定まらて
急りうちり学悔し雲
進こぬる人の位れうらやほし
執ひしその功多き枝
末の世も残るぬ名をや思ふ人
をしえ正しき云の葉れ及
疾ある猛き人も初らきて
汝もや存ぞれ書求むらん

如 員 逸 損 員 重 損 逸 淨 重 章 如 逸 損 員

写ハく長はくハぬ譽ヲの暮
露より霜の結ふ空の根
月影の破る田西の秋草
竹の葉のこそあもかくま
三經の川より花の朽ぬらん
處る斬の森面ぬりころ
云語る暮も暮しき燕め
人言ハ阿し古塚の本
夢ハ皆已りまよやあらん
分ちかくきあけく物此床
文章逸眞逸眞文淨損

尋由入道ハさうき奥山よ
迷てぬ意の便りもこのも那
今来んと頼め一月もつき曇
拂ふまぐらの露それり
暮近き夕とまれときりま
いつより壁のくはま活ふらん
人えへぬ唐ハ顔く傳るれや
古田北京の霜とくし
石とく小沢のあも氷居て
こよかこよとそむ鱗
如損員重逸眞淨豪文如

詠すすくハ赤群はく瓦あきりし
 夕日 幽り 福の野の末 負
 栄人の海を思辺の乃きき 重
 双ふと冬るき里の家く 逸
 天放の鄙の風俗を耐文に 垣
 禱の意より明そまゝ 為
 陰志らん花よ人の御り 豊
 あうきを免くらまを春乃盃 文

文化十一年戌九月十五日

和州初瀬寺會

何人 里村玄碩

寺とハ紅葉小海にる太山哉
 開伽くむ神小僧く月影 能成院
 空渡る層の危より扱ハ明て 教任
 屋む浦津の波志川よりあり 秀雄
 とりくは船や入江を出まらん 海成
 ぬ余波あり晴るる丁海 信惠
 ありまけみより流り野辺の末 用

こゝろくまよしきふ 奏豹 碩

返しぬる田西の京多袋千町 任 雄

一公卿るふぬ里の中乃 任

綾う家ハ新もるくまを爰彼 碩

雲の強回り尺由の炭竈 成

小野山ハ降はる名も今物晴て 成

岫音はそき音の下形 用

丸木檜あなこ小麻や唱ぬらん 任

書侍承多いとく其交秋 雄

更初む月をくらとておろこち 成

神をぬくまハ西海う海り 碩

ちきりてし舞ハ記念とまありて 雄

うち詠ぬる屏風右幸り 信

移るそきまよくつらぬ花の色 用

出ー日かりの永き川はふ 成

志らくしぬることある海の京 碩

音羽の山まきまこと晴り 任

相板の園ハそ方よまきうとて 信

本綿附鳥乃暮すそ波ゆ歌 碩

衣くの神ふ通つる 風寒を
あもつけ暮ふ身ひ 路の月
小車を立一傍へハ亭ぬりて
所入り入頂とあ海を玉垂
口の統の洞つもあるき宮の内
白ふ色もくまらひの梅
残りるく垣母の雲れ赤解て
窓の外面もある 陽烟
人を送る野辺の煙りや孤ぬらん
任 雄 用 碩 成 信 開

明まてく日のく舟る 茅の村
扱ゆくそ出てせり 策根山
定うよそれと唱保とくきを
村面の雲ハ残り 喪の陰
清くも社とよとさ
住吉の濱色ふ孤を波寄て
いさ拾ハ甲のうき忘れ貝
たそれ女の芦れ 一夜を築りうも
思もぬをるるとあくあも一敷
御佛の音く 救ふ魚とさ
任 碩 用 雄 成 信 碩 開

音さる杖多し月夜の明きく
 多り出てゆく夜虫の隙をるこ
 深くをさぬのむきふ粟津野
 待又花の下細解うて
 山井多し雲を氷夜居より
 夕さきハ沖かたりたる峯尻
 瓜木推はく多しはそ及
 重りし一村雲やぬるん
 黙のかさるる叢さりーき
 赤麻く小笠の隈の冬枯よ

信 用 任 成 碩 快 演 碩 用 碩 雄 任

向ふ木幡の里はさきさき
 松を多し今宵伏見小坂の者
 月多しいさよふ旅の衣手
 思ひ屋日妹や秋いうるん
 汝多し誰をう松虫乃多し
 古塚を同敷野西せの音川
 ん志川うり習ふ六の字
 二月の別思をぬんをるし
 多し雲層の帰る比及
 明残る處ハ多し 棚引多し

碩 用 任 快 碩 信 任 快 碩 信 任 快 成 任 快

白き処や花井山の端
依條姫の衣はきてふ時よ今
風おもむろよ 渡る野の原
遙るる沖小浮つる船又へて
友よひくをま 浦の海士人
運ふ魚き 潮やきくはぬん
去砂り 立り 雲の暮りく
引末の千早を松よ教へ海
子をあもふ親のふありしも
急よ角よ学ひひかききききき

任 願 用 信 願 用 信 任 願 願

るるり 殊務也 月の写繪
露のるを糸 糸よ次應の浦
都をきよる 涙をささぬ
引琴のいとうらめき世を侘て
松やく風のさそふ 隠家
焼流る 其は糸 強く 烟らじ
錯摩の市をささるる 暮昏
あきよハ波の浮葉小漂ひて
さるるら 咲る 花の乱藻
川岩も 咲る 斗の白雨ふ

惠 願 用 成 快 任 用 成 快

土丹生の小庵の顔きそむる
山際此里痛ハ明て月落こ
竹の葉ふ毎よふある霜
清てぬる豊豆等の寺の秋文て
強さを祈りをかゝる初瀬女
黒髪女の長き髪や彩むらん
又まハ次女の凡助いりり
自ら引る赤裳のあてやかに
塵をも居さを清き玉階
赤室むる色染しを扱此を

雄任快 碩 閑 快 閑 碩 任 閑 碩

螢の影を去りり行
曉乃鐘やそ方よ響くらん
風評く磯り船毎一頃
きのふより一入中さる花の山
宇夜くり續く平の侍ひ

快 雄 成 信 任

文化十一年戌九月十九日

初瀬山常盤寮會

何人

玄碩

秋山をくろきをも余江の夕哉

谷の扉を照を 月歌
露涼き河邊よ通ふ乃まで
小篠う上れ風志のうまり
おろけてや思本様お母さん
返してハ又休む田の畔
幸近の處初ぬる里くに
おき来小多の 待ハ入相
浦波のまよく浮小泊り船
破痛り境ハ満ちる舟
立續く等村おの陰涼こ

教任 本用 演快 信惠 海成 秀雄 執事 任 快

夕小の物見の 卑教く
まゐるハたとめられ恨めて
そおももく多くおるうつこ
繁りをハ今宵定よと斗り小
月り栄何の媒乃 神
るうかゝる薄りおる女布花
ゆふ枕かる武花壁の露
飛層や遙くきささるまはん
朝まきき日の新はのうまり
池おれ處も花小お薫り

用 成 惠 碩 碩 用 任 快 雄

二
海根乃松ハみとり活々り
吾とくる山を志つう小町離
幾ん園詠ハそこと志つう
家中ふ片き人目をいづせん
うくれころふ海とふ好業
うさるるを琴の調も押やうそ
須磨の浦津の波そ立そふ
村千鳥志砂の月小深くらし
吹けハ歌ころれ寒き松風
物津くち散たする夜庇

成 碩 蕙 成 快 蕙 碩 用 任 成

久くはてはて荒る一ツ家
羨小伏控や床をメぬらん
野あり小くふる小田の加こまふ
礼れはくそ果るぬ物ひ小
赤向ふ暮る今を中むら
葉の枝を折るん子枝屋をまそ
百種ころころ神の露けさ
雲晴る秋の指場け末磨こ
月まてそふ志守橋守
棧をこころも棧の赤連て

任 用 快 碩 蕙 快 用 任 碩 雄

け頃夜をさかりある者
黄昏の月ハあてえへくし
い川くさくさう帰るかりく
豕ハくく限りもあぬ因ふ
ちやハ三年の日教るるり
新花ウきせしる此悔くまて
化し笑りを習ふ遊女
曇りあき鏡の影を恥よ只
あつと裳ふりきけ神乃茶
稚をあひふん志懐かて

碩快任碩雄用碩快任

断ぬる丁そハ機毛のく糸
横うとこ已たる稔下の花柳
そのおくりふもゆる陽炎
其廿野ハ馴てや豹の勇むん
鷗多々羽ぬく沖の塩合
新踏を白洲の月れ志くし
法をえまきハふりきあ霜
名積波よる稲系の末ハ言初て
店りよ帰る祖の細乃
山里ハ隣をいふも福川らし

碩快任碩雄用碩快任

吾の悔る日ハ向人をも
峯跡の奥いたくも神小風吹て
妻ましく清と雉子あく暮
前兼る焼蛇の原北朝明小
とん蕨も手ふもたぬらま
結ふもも岩湧水ハるりて
るの祈りをかぐる伝連縄
兔又角又障りりちるる煮ばし
余込又立名の身こそつらま
門ありて答る大れうら免一

任成雄惠碩用快任惠

待り文ても運ま月代
肌寒く音るふ風小寐覚て
吹けハむるうり衣る川あり
海る手教ハいつら旅の及
富士の根かくま又月面北雲
時多彼面け西よるき渡り
掉さしやる船ハ川上
流津流も咲ぬる花も白妙小
あのみうまの末も永日

成碩雄成用快惠任成

文化十一年戌九月十六日

豊山占林寮會

青何

玄碩

うましく濃染しを山の錦う車
 苔ありさそふ露乃白葉 真淳
 青晴る里すふ近く層唱て 秀雄
 月不りありとるを方の空 教任
 秋風は野路の海さや多く片ん 演快
 おもひくよえふ 本用
 夕ふのことも晩るる年の暮 海成

砌りハ雪の海積りり々り 太新
 浮雲や新れ外山を漏川らん 執事
 寐は行ふれをさかるる 碩
 吹通ふ風の末より種吹て 任
 船さしある入江涼しき 快
 水の面は移るも岸る柳陰 開
 殺も殺多ふあそふ牛の子 雄
 をの自恣舞角や笛を調ふらん 誓證
 悟りの乃を坊うとまき無何 成
 意多し先ん悔ふを習 新

はまきあき人を月小恨むる
 露分て回をいく夜宇治の里
 波をやくうり重む川上
 後士よ咲はいふ春の花
 花あかしく山のふところ
 名 朝日新さし添峯の雲消て
 髪を結ふ 衣の身
 罪咎乃けた辻をいかせん
 あもむく國の境をるけき
 國越て勇める弱の足柄ふ
 快 任 雄 碩 快 任 淳 院 碩 用

春かやまきあきるる村
 永春子の今宵は来んと下待て
 あもひ慰めあきと仇琴
 朝倉の春も言り宮所
 爽けけふく霜の白布綿
 寧さをや侘て鳥の羽吹らん
 稽ハ安けよ雲浮ふ川歌
 きよめるる月の波るふあをれて
 趣むまぬ妻はめきき
 むまき若はる枯もせぬ洞の中
 快 任 雄 碩 快 任 淳 院 碩 用

了野の奥多いと志川あり
佛幸早終りし詔の面そくさ
善漸ちうく風そあさは秋
海士小船泊る浦端ハ波もほ
末志ふ雲りはくく松系
花り今寺ふ覺ハ埋まて
誦經のあうよまのる甚身

淳雄快成用碩任

右世吉

文政十一年戌九月十七日

豊山長谷寺寮會

白何

玄碩

雲雪を下枝小峯此捨系我
み葉の多しり道己りぬ宿
見る月ハ秋も満を庭向て
善中ので雲霧のあそふ雲りく
浦船を吹浪風やさそあらん
おるをけるや霜のむく芦
志のりも冬田北西の明離

秀碩 海成 中用 信惠 教任 演快 執事

仍人稀の管茨乃前
 執事
 秋涼くも種ある方此里近こ
 寐覚のましくらそま立そま
 取ふまはいとく侍る時多
 ありよ茂まる山陰の乃
 むまを苔ふ松の録り此ま常て
 んありそやこもる隠家
 妻恋の忘らまぬ所ハ恥ま
 身ふま裳於人のほれま
 月をさく恨やいとく増らん
 成 碩 用 任 兼 用 碩 雄

種波らるりの秋乃夕暮
 碩
 冷多きハ湊りある波の音
 友呼うこりあるむく千鳥
 嘗もむととりあ傳ふ花の枝
 うまもたるあく圍の朝明
 里の子や出ても用は遊あらん
 赤垂髪もあくるともやハ
 筒井筒涼も思ひをまとき
 大路り立てねむらう方
 惠 雄 碩 成 任 碩 雄 用 碩

留居り向ふ短杖乃月
 牧の暮り八烟りの末もまきさかり
 志とらもとらよそゆく 茅村
 毛のまきこく 降や雲たまたむる
 禱おるまき寺ハ近し堂
 罪咎ハ留りぬる小消る悔し
 細をまきこく波のうろくま
 雫の海流北の末ハ川こそも
 後り毛長き勢田乃長橋
 松原ハ入つても奥のむるうらて

用 碩 任 碩 用 雄 惠 任 碩 用 碩 惠 任 碩 用

社り毛免る象竹の暮り
 繪きてや祝部ハ扇かきまきん
 額ハ鳥帽子ハ頭きまきり
 淡舟の乃まふ余浜るらて
 豊なる雁し丸まき乃内
 外務ふ毛包する甚れ花盛
 永くし日のめらるる 楠干

用 惠 碩 任 成 雄 惠

右世久

文化十一年戌九月十八日

初瀬大龍院會

花之何

玄碩

あ庭も黄むやあけ此初瀬川

檜原めり来て清き月影

海成

釣竿兼まけハ杖や露のかゝるん

秀雄

庭の星の裏もさへ廣くも

本用

山涯も通ひ馴るるるりて

信惠

おとり麻子の志もしイむ

教仕

二月雨ハ晴るる思の狭間田に

執筆

うちるるるるやいさむく竹

碩

川尻雲ハ残らる吹ちらし

成

下を發り候くあゝ

任

霜も白土丹生の小庭の朝朗

雄

偃一はく雲枯るる草村

成

あゝあゝて誰う身ひ路小うき雲

碩

あゝあゝのこえる君うあゝあゝ

惠

一争乃文の便りも稀ふく

全

あゝあゝ都りいらり帰らん

成

宗駒の歩こも遅き月の下

雄

小倉守狩場乃余波長せむ
 集ひはく煖酒を砂うとし
 務し軍志 誉 とりく
 救多ふを折い色よき花の枝
 霞ふたしる 滋賀の山陰
 名 朝明やのとうよ 禱乃をくらん
 今そむしむる法の新ひ
 ちく補くを志もーもあき物の恠ふ
 恥ぬ多いくりおみこまき髪友
 永脊子ふとも同いりとうこたまで
 碩 雄 惠 全 仕 碩 惠 碩 雄 碩
 任 雄 碩

笑ハ何やーき 皆の音るひ
 善るそて救も志とられ鞠の場
 此本のねり風のまけーき
 ニツニツ 樽や 樽をあるらん
 月をて出て雲くらさ 山合
 神りつを秋の神ふ火焼て
 志を海霜のくさし 白木綿
 其は茶負ふ翁の眉の長けよ
 片は田舎多く位を安ん
 むつまーき 竈門ーの夕煙
 碩 用 煮 碩 雄 仕 用 雄 成 碩

直る控り世丁そ治まき
 賢まきや山より出て仕ふらん
 寂の中山をえらぬ云の葉
 飛鳥れ細を渡らも習ひて
 笑まうを免る喜の大空
 陰さく候てたるおく花の雲
 ほくろを雲永き日くの祝言

碩 全 仕 雄 成 用

右世久

文政二巳卯年三月吉日

花下染習園御直弟

里村玄碩之弟

筑波山連歌志 石井脩融書

文政六癸未年五月十日写之

沙門法成



